

いくさ物語表現史(四)

—平治物語のモチーフ—

山下 宏明

一 乱の発端

いにしへより今にいたるまで、王者のにんしんをしやうするは、わかんれうてうをとぶらふに、ぶんぶ二だうをさきとせり

『平治物語』の中でも古態を伝えると言われる第一類本⁽¹⁾の序章の冒頭の文である。散文の形式として、

- ① 論述
- ② 説明 解説
- ③ 描写
- ④ 語り

の四種類⁽²⁾があるが、この『平治』の冒頭は、①の論述のスタイルによるものである。それは、いくさ物語の冒頭にしばしば見られるものである。すなわち、

(将門記) 夫レ聞ク彼ノ将門ハ昔天国押撥御宇柏原ノ天皇五代ノ苗裔三世高望王ノ孫ナリ其ノ父ハ陸奥鎮守府将軍平ノ朝臣良持

ナリ舍弟下総ノ介平ノ良兼朝臣ハ将門ガ伯父ナリ而ルニ良兼ハ去ヌル延長九年ヲ以テ聊カ女論ニ依リテ舅甥ノ中既ニ相違フ

(陸奥話記) 六箇郡の司に安倍頼良といふ者あり是れ同忠良が子なり父祖忠頼は東惠夷の酋長なり威名大いに振ひ部落皆服す六郡に横行し人民を却略す

(保元物語) 近曾帝王御座キ御名ヲバ鳥羽ノ禅定法皇トゾ申ス天照大神四十六世ノ御末神武天皇ヨリ七十四代ノ御門ナリ堀河ノ天皇ノ第一ノ皇子御母ハ贈皇太后宮トテ閑院ノ太政大臣仁義三世故納言実季ノ御娘康和五年正月十六日ニ御誕生同年秋八月十七日皇太子ニ立セ給

(平家物語) 祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり娑羅双樹の花の色盛者必衰の理をあらはす

(承久記) 娑婆世界ニ衆生利益ノ為ニトテ仏ハ世ニ出給フ事総ジテ申サバ無始無終ニシテ不可有際限別シテ申サバ過去ニ千仏三世ニ三千仏出世有ベシト承ル

(太平記) 蒙ひそかに古今の変化を採つて安危の来由をみるに覆つて外無きは天の徳なり明君これに体して国家を保つて棄つること無きは地の道なり良臣これにのつとつて社稷を守る系図・理念の内容などに違いはあるものの、論述の形式をとつていふことで共通する。このことは、いわゆるいくさ物語が、動乱をめぐるてならかの形で治世論を根底にすえることから当然の形式である。それに多少の違いはあるにしても、これらの論述に、動乱の主体をなした人物を登場させることも共通する。このような、いくさ物語一般の形式にてらして見る場合、本稿でとりあげる『平治物語』の冒頭も、動乱をめぐるて治世論と、動乱に重要な人物を冒頭に語り出すのは、ジャンルとして自然の帰結である。この、いくさ物語一般の形式を念頭において、『平治』の冒頭を読むならば、治世論として文武両道を以て世を治めるべきことを説き、にもかかわらず世が乱れたのは、この治世論に抵触する人物が現われたからだと論を進めることになる。『平治』の場合、冒頭に登場するのは、

ごん中納言兼中宮権大夫右衛門督ふちはらのあつそのんぶより
きやうといふ人ありけり

と、藤原信頼である。『平治』の場合、特に、以下物語は、人物を中心として展開する傾向が強い。すなわち上巻には、信頼について、同じく院近臣である信西、信西に味方する平清盛、信頼に批判的な藤原光頼、それに院と主上、中巻には信頼に加担する源義朝、信西の子息、義朝の子息の義平、同じく頼朝、義朝の妾の常葉、下巻に

は、重ねて頼朝・常葉・義平・牛若丸ら義朝の遺児が登場する。そしてこれらの人物の配置が、平治の乱を描く物語を推し進める。特に、物語の冒頭に信頼を出していることを見るように、後白河院の近臣、藤原信頼を中心に、これと対立する信西の両人の対決、これに、信西の側についた平清盛とは対照的に、信頼に従つたために悲運に見舞われることになった源義朝の、都合三名が物語の重要人物と見られる。このように人物を配置するのが、物語の序章とも言ふべき冒頭の論述である。

二 動乱と信頼

上述したとおり、物語は序章の治世論的論述に続けて

みづからてをくださざれ共、こころざしをあたふれば、人みな
帰しけりといへり

この後、へしかるに」といった逆接の語を挿入すべきところで、

きんらい……あつそのんぶよりきやうといふ人ありけり

として信頼を出し、その家系をたどりつつ、この信頼を

文にもあらず武にもあらず、能もなく。又げいもなし。ただて
うおんにのみほこりて、せうしんにかかはらず……かけまくも
かたじけなく、おほけなきふるまひをのみぞしける。みる人め
をおどろかし、きく人みみをおどろかす……ただえいぐわにの
みぞほこりける。

と、一方的に信頼の奢りを責める。この形式は、上述の『将門記』

や『陸奥話記』が動乱の主役の素性、系図を以て語り始めるの同工である。それはまた『平家物語』の冒頭近くに

ま近くは六波羅の前太政大臣平朝清盛公と申しし人のありさま、
伝へ承るこそ心も詞も及ばれぬ

とするのと重なる。言い換えれば『平治物語』は、この信頼を重要人物として展開すると言うべき構想を持っていることが明らかである。

三 信頼の行動

序章に引き続き、信頼の大臣大将兼官の願望を、才能にすぐわな
い、奢れるふるまいとし、一方、同じ院の近臣の中でも、諸学を兼
学する信西とこれに対比する。信西の人柄を顕彰して後に、この信
西が信頼の大将所望をあるまじき事といさめたという。しかるに院
は

きみはげにもと思召たる御きしよくもなし

と不満の色を見せるため、信西は重ねて、

だいたうあんろくさんがおごれるむかしをゑにかきて、いんへ
しんしらせたりけれども

なおも、院は

げにおぼしめしたる御こともなかりけり

と、信西の忠告に耳をかさない。序章に王者の道として

なかんづく、まつだいのながれにおよびて、人おごつてうい

いくさ物語表現史(四)(山下)

をいるがせにし、たみはたけくしてやしんをさしはさむ。よく
ようをいたし、せんくちうしやうせらるべきは、勇悍のとも
がらなり

とするのは、まさに、この信頼のあり方を念頭においた主張であつたことを示す。

この信西のいさめが効果なしとするところで、信西の院奏上を耳にした信頼は、出仕をとりやめ、早速

むまのはせひきにみをならはし、ちからわざをいとなみ、ぶげ
いをぞけいこしける

それは、

これしかしながら、信西をうしなはんがため也

であり、行動を起こすのは信頼の側であつた。その信頼は、一旦、
平清盛を味方にせんとするが、平家一門が榮華をきわめる現状から、
その抱え込みは無理と判断して、保元の乱後、

平家におぼえおとつて、ふくわいしやなりと

と思われる源義朝に接近をはかる。これに乗せられるのが義朝であ
る。この巻頭からの物語の言説は、その後の信頼・義朝兩人のたど
る行方を示唆している。おりから清盛が熊野詣でに出掛けて不在の
ところを、信頼の側から事を起こし、院の御所、三条殿へおしかけ、
上皇と上西門院を保護し、これを内裏へ移し、一品御書所に押し込
める。この時の衝にあつた重成について、この重成が保元の乱に
も崇徳を守護したことを想起し、

いかなるしゆくえんにてか、二代のきみをばしゆごしたてまつ
らんと心ある人は申しけり

と軍記物語の常套の、〈心ある人〉や〈人〉などの語で示される、時
代の趨勢を見る目を持った〈人〉の思いをかりて、この信頼らの行
動に水をさす。にもかかわらず、信頼は

兵共をいさませんがはかりごと

に、早々と勲賞を実施する。このふるまいを見た大宮左大臣伊通が、
多くの人をのみ込んで殺した井戸に、

など井には司をばなされぬぞ

と痛烈な皮肉を浴びせる。この伊通は、まさに〈心ある人〉の一人
でもある。この直後に和泉守光康が内裏へ参り、

今日せうなごんにうだうがくびをきりて、神楽岡のしゆくしよ
にもちきたりて候と

報せる。これを早速、信頼が実検する。事件としては、これに先行
するはずの信西の死去の経過を、この後、回想的に

此せんもんは、去九日うちのことかねて内々しりけるにや
として、時間をさかのぼるが、このような物語の順序も、一貫して

信頼の動きに焦点をあて、信西の首渡し、その実検に、
のぶよりひごろいぎどをりをばいまぞさんじける

と、信頼への非難を語るためにあつた。

この後、内裏での詮議の場に臨んだ勸修寺光頼が座の席順を非難
し、信頼をたしなめ、信頼は人々の失笑をかう。この後も信頼は大

赤口の袴をはいて、天子のようにふるまう。その信頼が、成頼に凶
られ院と主上の脱出したことを知って狼狽し、

手をはたと打て、走かへり、中將のみみにささやきて、かまへ
て此事ひろうし給なといひければ

事を報せた成頼が

世におかしげにて、よしとも以下のぶし共みな存知して候もの
をとこたへければ、信頼、出しぬかれぬくと云て、大のおと
このこゑふとりたるが踊上りくしけれども、いたじぎのひび
きたるばかりにて、踊出したる事もなし

という醜態を演じる。信頼の要望の描写、疊語を駆使して描かれる
おおげさな行動にもかかわらず、これをへ……なしと否定する言
説に見るとおり、語り手は明らかに信頼を戯画している。待機する
信頼の服装を、

あかちのにしきのひたたれに、むらさきすそごのよろいに、く
わがたうちたるしらほしのかぶとのををしめ、こがねづくりの
たちをはき、ししんでんのがくの間のなげしにしりをかけてぞ
ゐたりける。年二十七、大のおとこのみめよきが、しやうぞく
はびれいなり

としながら

その心はしらねども、あはれたいししやうや

その本性はわからぬが、とにかくうわべだけは大将らしいと、きわ
めてひややかである。

六波羅での平家との合戦において、平家側は皇居を守護するため、信頼の軍を誘きだし、これを包囲して討伐しようとして企てる。この場の重盛の態度を

しげもり、此せいを見廻て、今日のたたかいはたぐいなくすぐれぬとおほえ候ぞと、年号も平治也、みやこも平なり、我等も平氏也。三事さう応して、などかいくさに勝ざるべきと申されければ、兵ども興に入て勇あへり

と、直接話法をもちいて語り手は重盛に一体化して共感的に語る。この重盛とは対照的に、両軍の時の声を聞いた信頼を

ししんでんのがくの間にあたりける右衛門督、けしき事柄以外にかはりてぞ見えし。色はくさのほのごとく也。何のやうに立べしとも見えざりけり。人なみくゝに馬にのらんとたちあがりたれども、ひぎふるいてあゆみもやらず、南面のきざはしを下煩、馬のかたはらによりけれども、かたあぶみをふみたる計にて、くさずりの音のきこゆるほどふるい出てのりえず

見るに見かねた一人の侍が、信頼を押し上げたものだから、弓手へのりこして、まさかさまにどうぞおちたりけるその顔面には砂がひしとつき、鼻血までたれて

まことにおめかへりてぞ見えし。侍どもあさましながら、おかしげに見るもあり
ここで義朝を登場させ

左馬頭ただ一め見て、おくしてけりと思ければ、あまりのにく

いくさ物語表現史(四)(山下)

さに、ものもいはざりけるが、こらへかねて、大おくびやうのもの、かかる大事をおもひたちけるよ、ただ事にあらず、大てんまのいりかはりたるを知らずして、与してうきなをながさん事よ

とつぶやかせる。相手の重盛は勿論のこと、信頼に味方した源氏一門の挽回をはかった義頼までも動員して、この兩人との対比の形で信頼の醜態を語り、その侍賢門の防備をも

まことはたのもしげにもみえざりけり

と、語り手の直接心情を投げつける。重盛については熊野参詣の途上にあつた清盛が、信頼決起の報せに恐れて一旦四国へ退こうとするのを、重盛は信頼の文がさぞかし諸国へ回つていよう。平家が一旦、朝敵となつては、四国・九州の兵も一門に従うことはあるまい。即刻帰洛をと進言する確な判断を行なつたと描いている。合戦に際しても、信頼は、一旦、義朝にしたがつて六波羅を攻めるもの、ひたすら

いづちへ行てかよかりなんと逃道をとへば

ついに郎従のつまはじきをあびることになつたという。はては、逃げだす信頼を、金丸が義朝にそれと報せると

義朝、よしやれ、目なかけそ、ありとても物のやうにたつべくはこそ、中く足手に紛てむづかしきにとぞ

相手にするな、かえつて足手まといだと信頼を見限つたというのである。その単独行の敗走はみじめさのかぎり、蓮台野で葬送帰り

の法師どもにもなぶり物にされ、ようやくたどりついた御室で、上皇に命乞いをするものの、結局、とらわれの身となって六波羅へ連行される。同じくとらわれの身の成親を、重盛は舅であることから助命するが、命乞いをする信頼を、重盛は

なだめられておはずとも、何程の事か候べき。其上にもたすかり給はじ

とつき放す。やがて斬刑に処せられた信頼の死体をも

大の男肥太たるが、頸はとられてむくろのうつぶさまに伏たるうへに、すなごかけられて、折ふしむら雨のふりかかりたれば、背みぞにたまれる水、血まじりて紅をながせり。目もあてられぬさまなり

と、無残に描き、通りすがりの、前に信頼のために所領を奪われた老僧に杖を打たれるという辱めにまであう。しかも、その死にざまを重盛から聞いた伊通は、

一日の猿楽に鼻かくといふ世俗の狂言こそあれ、此信頼は一日のいくさに鼻かきてけり

と、回りにいる人々とどつと笑ったという。このように、序章から一貫して、語り手は信頼を指弾し続け、その骸をも恥辱にさらすのであった。

四 光頼の批評

信頼の先走った決起から、内裏側にとどまり、心ならずも信頼に

ひきずられることになった公卿の一人に、勧修寺光頼がある。内裏から公卿詮議の召集がかかって、やむなく参内する。大勢の兵士が防御体制をしく中を、光頼はへはばかりる所もなく参内し、殿上に並びいる公卿を見渡したところ、意外にも上臈が、座を低くして列している。信頼の威光をおそれの上臈たちのふるまいであったが、光頼は、

しやくとりなをし、きしよくして、御座しきこそ世にしどけなく候へとて、しづくとあよみよりて、のぶより卿の着たる座上にむずといかり給
ので、さすがの信頼も

いろもなくうつぶしにぞ成にける

と、逆に光頼に圧倒される。へむずとの擬態語が示すように、語り手の光頼への思い入れを、信頼と対比的に描いている。この光頼の豪胆なふるまいを、並み居る兵士たちは、

あはれ大かうの人かな

同じ合戦に参加するのなら、この光頼卿のもとにこそ参りたいと語ったという。これらの人々の感嘆のことは、

此あひだ人こそおおくしゆつし給しかども、のおよりのていじやうに着給へる人はなかりつるに、此人こそ始なれ。門を入給ひしより、少もおそれはばかりたるきしよくもおはせざりつるに、し出し給たる事よ

は、まさに物語が語って来た上述の光頼の行動そのものを指してい

る。言い換えれば物語を語り、受容する語り手の思いそのものを、これら並み居る兵士、人々の思いにこめて語っているわけである。この光頼の示唆により主上を盗みだした惟方を

其よりして京中の人、中小別当と申ける

という〈京中の人〉も、まさにこの場合の兵士たちと通底する物語の聞き手である。

この内裏詮議の後、光頼は弟の惟方を呼び寄せ、惟方が、過日、信頼と同車して信西の首実検におもむいたこと、そもそも検非違使の別当たる者が、へ人のくるまの下にもものごとせんきもなし、特に首実検を行なうなどもつてのほかとなじる。

むかしの許由は悪事を聞て、頼川にみみをこそあらいしか、此時の大裏のありさまを見きては、みみをもめをもあらいぬべくぞおぼゆる

と光頼その人が許由の故事を引いて信頼を非難する。信頼の僭上を非難する光頼は、さながら『平家物語』で、父清盛をいさめる重盛に相当する位置を占めている。

後白河院が、やはり成頼に促され、仁和寺へ赴く。北野神社の方を伏し拝み、讃岐院の難をしたので馬を進める。その

又あかつきならぬ夜半なれば、あり明の月も出ず、北山風の音寒、かきくもりふる雪に、御幸なりぬべきみちもなし。草木に風のそよめくをも、兵共の迎奉るかた御きもをけさせ給けりという道行に、語り手の院への同化の姿勢は見られないけれども、

語り手の思いは院に接近している。この道中の院の

さまさまの御ぐわんをぞたてさせ給けるをめぐつて、

世静て後日ひよし社へ御幸成たりしも、その時の御願ぞときこえし

には、いみじくも語りの現在が乱後に属することを物語っている。つまり、乱後の見通しから乱の経過を語る、言い換えれば事件の行方を先取りする先説法を持ち込む。中世の物語、特に事件の展開と物語の語りとが、時間の順序から言つて同時進行するのが一般である。いくさ物語としては、異質の方法をとっている。この事實は、やはり信頼の滅亡を、その僭上から当然あるべきこととして語る、いくさ語りの語りを示すものに他ならない。極言すれば、物語に登場する大部分の人物が、信頼を対極において展開すると言つても過言でないほどである。

五 信西との対比

中でも、この対比の極にあるのが、信頼同様、院の近臣であった信西その人である。

上述したように、機先を制した信頼の行動の前に、信西は都を脱出し、その宿所は敵の手にかかつて焼き払われる。ここで物語は時間をさかのぼり、信西がへ南家、はかせの身ながら、不遇をかこつていたと語る。それは、同じ院の近臣ながら奢りをきわめる信頼と

は対照的である。出家を条件にえた少納言の官をも、この度の信頼の決起ゆえに奪われることになった。それを語り手は

昨日のたのしみ今日のかなしび、おもへばゆめなりまほろし也。

しよぎやうむじやうのことはりめのまへにあらはれたり。きつ

けうはあざなわれるなわのごとしと今こそおもひしられたれ

という、語り手の直接心情表現は、やはり語り手の信西への心的接近を示している。

その信西の死が、内裏での公卿詮議の場に知らされることは上述の通りであるが、その死の場面は、一旦、時間をさかのぼり、語り手が、へたはらがおく、大たうじといふ我しよれうの現地に焦点をおいて語る。この現地視点の見られることが、『平治』の中でも第一類本の特色である。信西は、三日さきだつて出たる天変をへ忠臣君にかはるといふ天変也と判じ、へ此時我命をうしなひて、きみにかはりたてまつらんと決心し、掘った穴に自ら埋められて死ぬことになる。この場面を第三人称の全知視点を以て語りながら、それが十一日のこと。十四日に、光康の郎等が所用で木幡に出掛けたところで、泣き腫らした顔の舎人に出会い、これをおどして問い、現地に案内させて、

たはらがおくにゆきてみれば、つちをあたらしくはね上たる所あり。すなはちほりてみれば、じがいて被埋たるしがいあり。そこで、へそのくびをきりて奉りけるなりという。この部分は、これまでの第三人称視点の語りを光康の郎等その人の語りとするもの

で、これも、例によって第一類本の現地語りの叙法によるもので、しかもへ奉りけるなりは、この段の冒頭、内裏詮議の場で、

いづものかみみつやす又だいらへまいりて、今日せうなごんに

うだうがくびをきりて、神楽岡のしゆくしよにもちきたりて候

と申入

れていたのを受けるもので、この間の、信西の行動を語る部分が、時間をさかのぼる形で挟みこみの形になるものである。

その信西の首が、へやまとしを渡され、へひがしのごくもんのまゑなる樗の木に懸けられるが、

京中の上下いちをなしてこれを見る

と、またまた京中の人々の目を以て信西をとらえている。その場に居合わせた隠遁者が信西の死をいたみ、国家の先行きを危ぶんで泣くが、この老僧のことばを

これをきくともがら、袖をしぼらぬはなかりけり、

と語るように、前のへ京中の上下の人々の思いを代弁するものであった。後日、この信西の子息の流刑に処せられるのを、

天下の擾乱に紛て、君も臣も思召誤てけりとぞ、心有輩は申あ

へりける

とするのは、やはり京の人々の視点への接近を一貫しているし、その後、重憲(信西の兄)の室の八島への流刑の道行を語るのも、この人々への思いゆえに他ならない。

以上のように信頼と対比的に語られる信西の忠誠や、その子息の

悲運を語ることが、物語言説の大きな部分を占めることは明らかであろう。

6 義朝をめぐる語り

『平治』の物語において、義朝の占める位置が重要であることは、これまで指摘してきたところである⁽⁴⁾。六波羅の合戦に、義朝は、味方した信頼が心を寄せるに値しない器であることを見抜いていた。しかし、清盛ら平家一門を相手にする以上、転身するわけにはゆかない。だからこそ義朝は、川原に追われながら、義朝を追い来たつた一門の頼政に対し

や兵庫頭、名をば源兵庫頭とよばれながら、云甲斐なく、など
伊勢平氏にはつくぞ、御辺が二心によりて、当家の弓矢に疵付
ぬるこそ口惜けれ

となじる。ところが頼政は

累代弓箭の芸をうしなはじと、十善の君に付奉るは全く二心に
あらず。御辺日本一の不覚人、信頼卿に同心するこそ当家の恥
辱なれ

と返す。この頼政の反撃に、義朝は、

ことはり肝にあたりけるにや、其後は詞もなかりけり
という。まず義朝に平氏に対決する源氏一門の意識があることを注目すべきであるし、それに、頼政が返す反論に、これが「肝にあたりけるにや」、詞もない義朝の信頼評が、これまで見て来た物語の語

る内容であったことが明らかである。しかも味方の不利な状況に、義朝は、乳母子、鎌田の

あれ御覧候へ、敵こそわれらを取りこめんと、勢をまはし候へ。
ここをしりぞかせ給ひて、事のやうを御覧せられ候へかし
との忠告を、義朝は

ひかばいづくまでのおべきぞ。討死より外は又別の儀有べから
ず
と、駆け出そうとするのを、鎌田は重ねて

若又のびぬべくは、北陸道にかかりて、東国へくだらせ給ひな
ば、東八ヶ国にたれか御家人ならぬ人候。世をとらむずる大将
の左右なく御命捨られん事、後代の誇有べし

と促す。この鎌田の勧告は、後日、兩人の東国落ちから、やがて野間内海の庄における闇討ちによる討死への伏線をなすと言つてよい。なおも、はやる義朝を、回りの人々が、制止する。味方の劣勢のなかに、平賀義信・山内俊通・長井実盛らの献身が、ようやく義朝を、西坂本から小原へと落ちさせるのである。その義朝の思いを知らずに、

いまはいづ方へもゆきぬらむと思ひつる信頼卿
が追い付き、

いかに東国へか、同はわれをもつれておち給へ
と信頼がとりすがる。この「思ひつる」の主体は語り手でありながら、実は義朝の思いでもあることは、これまでの物語の展開からし

ても自然である。この信頼のことばに

義朝あまりのにくさには、たとにらみ、あれ程の大臆病の者が、

かかる大事を思ひたちける事よとて、もちたる鞭をとりなをし、
左の頬さを二打三打ぞうちける

という罵倒は、義朝のへにくさであると同時に、語り手の憎悪でもある。結局、信頼は、ここで義朝に見放され、死への道行きをたどることになるのだが、しかも義朝の、同じ一門への思いやりはこまやかである。三郎先生十郎藏人(行家)は、義朝が一旦、関東へくだり、八か国の譜代の御家人を具して、再度都を攻めるまで

其時までわれらも、山林に身をかくして待奉り

その大事に改めて協力しようと泣き泣きとまをこひ、小原の方へ落ちてゆく。やがて竜華越えにさしかかり、横河法師二、三百人に前途をさえぎられ、山陰の難所に伯父義高が内甲に矢を受け負傷して、あわやのところを、義朝は、平山・長田と引つ返し法師たちを追い払い、相手のとどめを刺し、深手を負った伯父の最後をみとる。やがてさしかかる不破の関では、平家に志を通じる兵が多いと聞いて、
へ大の男のふとり極めへ馬はつかれぬ、かちだちに成てかなふべくも見えぬ後藤藤兵衛実基を見て、義朝はへ実基ははやとどまれと、同行を制止する。

やがて、たどりついた野間内海の庄で、長田のだまし討ちにあうのだが、後日、義朝の首を京へもたらした長田は、

(長田父子は)義朝が重内の家人たるうへ鎌田兵衛が舅なり。

京中の上下聞及ほどの者、忠宗父子が頸をのこぎりにて引きらばやとぞにくみける

と、語り手はまたまた京の人々の口を借りて長田父子を非難する。そしてその義朝のへ今度の合戦にうちまけては譜代の郎等忠宗が手にかかりて身をほろぼす。それはへ逆罪の因果今生にむくふにて心えぬ、来世無間の苦は疑なしと群集する貴賤上下、半は謗、半は哀みたりへ去年四月に、保元を平治にあらためられしを、平治とは、たひらぎおさまると書り。源氏亡なんぞと心有人々申あへりしが、果して此合戦出来て、源氏おほくほろびけるこそふしぎなれと結ぶ。例によつてへ心有人々への思いを借りながら、しかも保元の乱当時のへ逆罪の因果がへ今生にむくふとは、云うまでもなく、清盛の策にはまつて父為義を処刑せざるをえなかつた義朝の無為無策を指す。それは『保元物語』が讃岐院の崩御とその怨霊を語り、

中二年有テ、平治元年十二月九日夜丑刻ニ、右衛門督信頼ガ左馬頭義朝ヲ咄テ、院ノ御所三条殿へ夜討ニ入テ火ヲ懸テ、小納言入道信西ヲ亡シ、院ヲモ内ヲモ取進テ、大内ニ立テ箆テ、叙位除自行フ、小納言入道ハ山ノ奥ニ埋レタルヲ掘ヲコサレテ首ヲ被切、大路ヲ渡サレ、獄門ノ木ニ被懸シ事、保元ノ乱ニ多人ノ頸ヲ切セ宇治ノ左府ノ死骸ヲ掘ヲコシタリケル其報トゾ覺ヘタル、信頼卿軍ニ負テ六条川原ニテ被切ヌ、義朝方ノ負シテ都ヲ落テ、尾張国野間ト云所ニテ、長田四郎忠致ガ為ニ被討ニ

ケリ、一年セ保元ノ乱ニ乙若ガ云シ詞ニ少モ違ズ

としたのと重なる。その意味で『平治』は『保元』を受けていると言えるであろう。この義朝への思いの背後には、源氏一門のなりゆきへの思いがあることを忘れてはならない。

七 義朝の子女と物語

この義朝への哀惜の念は、その子女、遺児の上にも及ぶ。

義朝は敗戦後、常葉腹の三人の子息の将来を思いやつて、金王丸を使者に遣わして、しばらく山里に身を隠すよう指示を与える。この部分を、語り手は全知視点を以て

さても左馬頭義朝が末子共三人あり。九条殿の雑仕常葉が腹也と語り始めながら、使者金王丸が常葉母子を訪ねる現場に場面を移し、金王丸の伝言を母子が聞く。やがて金王丸が

……片時も（主の義朝の身の上）覚束なき御事にて候へば、いとま申てとて出んとしけるを、今若金王が袖に取付けて、われはすでに七になる。おやの敵うつべきとしのほどにあらずや、をのれが馬のしりにのせて、父のましますところへ具してゆけ、迎よものがれじ、具して行事かなはずは、平氏の郎等が手にかからんよりは、をのれが手にこそかからぬ、いかにもなしてゆけとなきければ、金王丸も目もあてられず。をしはなたんもかはゆく覚えて

は、事の経過を金王丸に焦点をあてて語りながら、母子のふるまい

を金王丸への思いに則して語る。F・スタンツェル⁽⁶⁾の言う「映し手」として語り進める。特に、義朝の、野間における討死については、これまでに論じて来た⁽⁷⁾ところだが、

平治二年正月……同五日左馬頭義朝が童金王丸、常葉が許に忍びて来り、馬よりくづれ落、しばしは息たえて物もいわず、ほどへておきあがり、頭殿は過ぬる三日の暁、尾張国野間の内海と申所にて、重代の御家人、長田四郎忠宗が手にかかりて、うたれさせ給ひ候ひぬと申せば

として、以下、この金王丸の報告語りとして、都を落ちて以後の、頼朝・朝長から、義朝の最後の物語を語る。聞き手の常葉を面前においての語りであるため、

頭殿軍に打負させ給ひて、小原へかからせ給ひしほどは、八瀬竜華越所々にて山法師と合戦候ひしが

の敬讓表現が示すとおり、主、義朝の行動を語るのに敬語の「給ひ」を使う。面前に常葉をおくため、謙讓語を使うことが示すとおり、金王丸の一人称語りの態を示す。この金王丸の語りの終結部分

……長田が家中へ走入て候へども、ぬりごめのうちへ逃入て候し程に、ちからおよばず。庭に鞍置馬の候しをとてのり、三日に罷上候なりと、委かたり申ければ

が示すとおり、金王丸の語りそのものをも対象化する語りの態を有する。つまり一見、金王丸の報告語りそのままを再現するかに見えながら、それをも相対化する、別次元の語りの態を有するのである。

この常葉にも、物語として注目すべき機能が課されている。平家は、常葉腹の子息の行方を搜索し、常葉の母の老尼をとらえ、尋問する。母は、孫の将来に期待してみずからの死を決意し、拷問にも耐え

末はるかなる三人の命をば、いかでかうしなひ候べき。行方しらせたりとも、申候まじ。まして夢にもしらず候とぞ申けるとして答えない。まず、この孫への思い、献身は後日の源氏再興への伏線をなすものである。母の責められることを知った、大和にいた常葉は、

わが子を思ふやうにこそ、母もわれをばかなしむらめ。我ゆへ苦をうくと聞ながら、いかでか出てたすげざるべき

(母が)責め殺されてのちは、悔しむともかひあらじと自首して出る。この常葉母子の思いを、へきく人孝行の心ざしをかんじて、みなく涙をぞながしけるという。母子への語り手の思いを、例によって、へきく人という不特定多数の人々の思いを通して語る。それに老母の助命を嘆願するために自首して出た常葉を見た清盛は、常葉のみめよいことに迷う。この美貌について、実は大宮大臣伊通が中宮御所へと、千人の中から選びだした美女であったことをさかのぼって語る。ここには美女選びの物語の類型が利用されている。その類型にふさわしく、

さればにや、見れどもくめづらかなるかほばせなり。唐楊貴妃、漢李夫人が、一度咲ば百の媚をなしけんも、これには過ぎ

じとたはぶれ申人もあり
とその美貌の描写は類型的でさえある。迷う清盛は、回りの人々の制止をもかえりみず

義朝が子共の事、私に清盛がはからふべきにあらず、賞罰の事は勅定にまかせて奉行するばかり也。猶うかがひて天氣にこそよらめ

と、判断を朝廷にあずけてしまふ。人々が

此少者ども三人が生立なば、末の世いかなる大事をか引出し候はんずらむ。御子孫の為こそいたはしけれ

と諫めると、清盛は、頼朝を助けた上は(後述)と、耳をかさない。この清盛の態度に対し、常葉は

これさながら清水の観音の御助なりとたのもしくて

観音経を読んだというのは、清水観音の利生談の類型を利用するものだし、これらの説話的な言説には、やはり明らかに源氏再興への伏線をひめると言うべきであろう。

義朝の長男、義平が、一門の頼政の心変わりを疑い、これを攻める。手下の滝口が負傷すると、これを敵の手にかけるにしのびず、みずからの下人に斬らせる。一方で、この清盛との合戦の場面で、清盛の行動をも共感的に語る語り手を見る時、義平が一門ながら背信の姿勢を見せる頼政を疑うところには、落ち目になる源氏一門への意識がかいま見られる。事実、義平は、後日、石山寺の近くでとらわれ、尋問のすえ、処刑されるまぎわに、

運のきはめなれば、今生にてこそ合戦にうちまけて、なきけなき目にもあひけれ。恥辱をばかくとも、死ては大魔縁となるか、しからずは雷と成て、清盛をはじめ汝に至まで、一々に蹴殺さんずるぞ。

と保元の乱以来の悲運をのろいつつ斬られる。この死にざまは、後日、平家が榮華をきわめるに至つて後、清盛の布引への遊山に、難波三郎は、へ夢見あしき事候とて、同行せず、宿所に籠もる。人々に笑われたため、遅れて参加するが、実は、悪源太義平の処刑直前に言つたおどしのことばが気になると語る。はたせるかな、突如、雷に襲われ、清盛は持参していたへ五筆の離趣経の利益により難を免れるが、難波は、義平の予告通り、雷に蹴殺されてしまう。平治の乱の結末を、後日の源氏再興へとつなごうとする意図が濃厚である。

八 頼朝と物語

前の常葉腹の幼児とともに、生き残るのが頼朝である。この頼朝については、長田父子の背信行為に対する人々の憎悪を描いた後、

同二月九日義朝が三男前右兵衛佐頼朝、尾張守頼盛が郎等、弥平兵衛尉宗清がために生捕れて、六波羅へ参る

と、前の義朝の死の場合同様に、まず現実に行進する事件を語る。その上で、順序を逆転して、さかのぼつて

宗清尾張より上りけるが、美濃国青墓の宿の大炊がもとにとど

まりたり

翌朝、竹の中に新しい墓があり、掘おこしてみると斬つた首が骸とともに葬られていた。子細を問うたところ、

大炊有のままに申間、悦て首をもたせ上落しけり

と言う。この問題の首は、この前、金王丸が常葉の面前で語つた、義朝の東国落ちの途中、膝を負傷して歩行困難になつて、涙ながらに父義朝の手にかかつて討たれた朝長の首である。金王丸の語りがこのように、全知視点を以てする宗清の行動の語りの中に位置づけられていたのである。ここで、語りの対象、焦点は、また変わつて、兵衛佐頼朝は、去年十二月廿八日の夜、雪深き山を越かねて、父にはおひをくれぬ

と、頼朝にしぼられる。この回想も、やはり金王丸の語りの中に兵衛佐殿馬にてこそ、おとなと同やうにおはししか。歩にてかなはせ給はず御さがり候ぬ。頭殿深雪の中にやすらはせ給ひて、兵衛佐くと仰られ候ひしか共、御いらへもなかりしかば、あなむざんやな、早さがりにけり。人にやいけどられやすらんと、御涙をはらくとおとさせ給ひ候し時、人々袖をこそしぼり候しか

を受ける。この度は、その頼朝の動向を、現地視点で語る。頼朝は父と別れ、

関河原と云所に着にけり。大(勢)従うてのほりけるに憚て、道のほとりの藪かげに立かくれけるを、弥平兵衛是を見付てあ

やしみ思ひ、郎等をもてめしとりてみれば、兵衛佐也。悦て乗替にのせてぞのほりける

その宗清は

なさけある仁にて、さまぐにいたはりもてなしけり
 と言う。この宗清の預かりの身となるが、頼朝の様子は、

たちゐにつけての振舞、常の少者にも似ず、をとなしやかなりけるを見て、人毎に助ばやとぞ申ける

この〈人毎〉の同情には、語り手の思いがこめられているし、それは、当然、この後の物語の伏線をもなしている。これも〈或人〉の助言により、頼朝は池殿(禪尼)に会い、助命を嘆願することになる。ようやく流罪に減刑された頼朝に対し、日頃、仕えている侍であろうか、

其内に侍世余人ぞ有ける。此侍共同心に申けるは、あはれ御出家有て、池殿にも御心やすく見えまいらせて、伊豆国へも御下さぶらへかし

と出家を促す。ところが、その中の一人であろう、頼頼源五盛康だが、

いかに人申とも、そらさかずして御髻をばおしませ給へと
 耳もとにささやく。そのわけは

或時盛康申ける千人がうちの一人とさぶらふ身のたすからせ給ふは、直事にてはよも候はじとうちをがみ、八幡大菩薩の御はからひにてこそ候らめ

と言つたので、頼朝は

髻きれといへども返事もせず、なきりそといふにも音もせず。

心の中こそ怖けれ

と言う。この盛康と近い役割を演じるのが、『平家』の一異本である源平闘諍録によれば、頼朝の伊豆配流中に、その夢解きをする藤九郎盛長である。この盛長・盛康の関係については未詳だが、盛康のこの場の頼朝への語らいには、やはり後日、源氏再興への伏線を示唆している。

この後、鞍馬で沙那王と呼ばれ、東光坊阿闍梨蓮忍に入門していた牛若が、日頃、わが身の素性を思い、

八幡殿(義家)奥州に下向して、後三年の合戦うち勝て、出羽守になされたりし其時の如に、われも成て、父義朝の本望を達せんとぞ思ひける

と言ひ、伊豆にある兄頼朝に申し合わせて、出家を拒み、師の蓮忍も

うへにはにくむやうに申せ共、その心中を存たりけるほどに、
 内々哀にいとをしくぞ

思つていたという。牛若の行動をも頼朝とともに源氏再興へと伏線化していくのである。後日、頼朝が拳兵して後、この弟、牛若と再会することになる。富士川の合戦から、平家が都を落ちて以後、過日、義朝を闇討ちした背信の人、長田が自首して出ると、これを散々使いきつた後に、なぶり殺しにするのは、前述の、金王丸が語つた

義朝最後の場面と呼応するものであり、しかもこの長田惨殺は、物語の進行から言って後日に属する内容を先説法により先行して語るもので、言い換えれば、それほど頼朝の亡父のための報復の決意は強かったことを示す。やがて頼朝の天下平定と、これまで頼朝に尽くしてきた近江の老翁とその子息、出家をとどめた盛康の恩に報いることになって、源氏再興をはたすことになる。この頼朝拳兵の動きは、ミニ『平家』と言ってもよい言説を構成している。

このように見てくると、『平治物語』の名称にふさわしく、平治の乱の顛末を主内容としながら、冒頭の序章に示された、後白河院の信頼への偏った恩寵が信頼をあるまじき行動にかりたて、平清盛への対抗から、この信頼に協力せざるをえなくなった源義朝の悲劇から、その遺児頼朝ら兄弟の苦節、亡父の恨みをはらす源氏再興を、物語の主題とすると言ってもよい。池の禅尼の奔走による頼朝の助命から、その流刑、伊豆への到着を以て物語を完結する第四類本とは、物語としての主題をまったく異にする。そして、この第一類本などの『平治物語』の名称にふさわしくない世界は、『保元物語』の、これも古態を伝えると思われる第一類本の、保元の乱に、源氏一門の分裂を招く主となったとする義朝像を継承するものとも言える。このように考えると、『保元』から『平治』へと、一貫して源氏の動乱への身の処し方を語るのが、この両いくさ物語であるとも言える。それに『平家物語』が、やはり、延慶本などの諸本で、源氏の再興、頼朝の天下平定の祝言を以て結ぶことへ脈絡を通じるとも

言えるだろう。

注

- (1) 未刊国文資料におさめる陽明文庫本・学習院本による。影印本により確認した。
- (2) 山下「平家物語の『語り』再考」『軍記と語り物』21 一九八五年三月。
- (3) 古態を伝える第一類本による。
- (4) 「平治物語の読み―常盤の物語をめぐって―」『文学』一九八四年四月など。
- (5) 山下「いくさ物語表現史三―保元物語における登場人物―」『名古屋大学文学部研究論集』一〇九 一九九一年三月。
- (6) 『物語の構造』前田彰一記 一九八九年一月。
- (7) (4)の論。